



⑱ 教訓は残されたか

中国の落とし穴？

習近平を見て毛沢東時代を思い出す、という中国人は多い。私には毛沢東時代の記憶はないが、自分を大衆の父と位置づけながら人民間の平等を強調する政治スタイルは、教科書で描かれる「あの時代」とたしかによく似ている。もとより歴史は繰り返すものだが、習近平は自分でも無意識に、若かりし頃に刷り込まれた価値観を体現しようとしているのかもしれない。

そこにコロナ禍が発生した。流行が中国から始まったことで、世界における中国の立ち位置は決定的になった。ウィルスが研究所から流出したかどうかはさておき、武漢での初動に問題があったのは事実。世界の死者数が30万人に迫る今日、中国という体制そのものにリスクがあるという議論が各国に広がる。先進国と中国との溝は、もはや埋めようのない状態だ。

たしかに、米中関係の先行きは暗い。ただし、習近平の頭に毛沢東的な価値観が巣食っているとしたら、中国にとってより大きな落とし穴になるのは対外援助である。

メンツと対外援助

コロナ被害の地球規模化と歩調を合わせ、中国は他国への援助外交を積極的に展開し始めた。自国を加害者ではなく世界の救世主と位置づけ、医療隊や医療物資をアフリカなどの国々に送り、「健康シルクロード」の構築を呼びかける。懸念

されるのは、こうした動きが米中対立という国際的な文脈の下で加速していることだ。

中国は大国のメンツを重視するが、毛沢東時代は特にそうだった。大躍進では米英と

の経済競争を謳(うた)った。中ソ関係が悪化すると、支援者拡大のため社会主義陣営の分断を図り、政治的に中国側に立った他国の共産党やアフリカ諸国に多くの援助を与えた。

先行きを懸念した中共中央対外連絡部(中連部)部長の王稼祥は、1962年、対外援助は現実を見て、自分の実力に沿ったものにすべき(实事求是、量力而行)とする書簡を中央に提出。しかし、逆に毛沢東の怒りに触れ、事実上の失脚を遂げる。

以降、中国は大々的なソ連批判と革命外交に乗り出した。国際的に孤立し、その経済は長く停滞した。

今日、中国はそもそも大国化を望んでいないので、地球の限られた富を発展途上国と分かち合い、等しく慎ましい生活が送ればいいのか、という優れた共産党員もいるかもしれない。

しかし、米国ですら手こずった新型コロナが、医療体制の整わないアフリカで広がればどうなるか。救世主ぶって積極関与すればするほど、のちに手は引きにくくなる。しか

も、中国では急速な少子高齢化が進み、若い世代の経済的な負担増は不可避。大規模な対外支援は、どう見ても長期的に持続不可能だ。

米国との意地の張り合いは、中国にとって危険だ。

耿飜の功績

習近平は清華大学で学んだ後の1980年代に、耿飜国防部長の秘書となった。耿は当時、軍隊の削減と現代化を進めていた。現在、軍の機構改革に大ナタを振るう習は、明らかにその経験を活用している。しかし、耿が対外援助の見直しにも功績を残したことを、彼は知っているのだろうか。

耿飜は軍人だったが、建国後に外交部に転じ、文化大革命が始まった後の1969年にアルバニア大使に任じられた。彼はそこで、中ソ対立を利用して中国から多額の援助金を巻き上げ、自分で働く意思を持たないアルバニア人の現実を目にした。政治的リスクはあったが、彼は過度な対外援助は不適切としたため、毛沢東に送った。

幸運にも、それは毛沢東が、中ソ国境紛争を受けて対外政策の転換を考慮していた時期だった。毛は提案を受け入れ、耿飜を中連部部長に任じた。中国は1971年、アルバニアのおかげで国連加盟を果たしたが、その後は援助額を大幅に削減し、アルバニアと対立していたユーゴスラビアと関係改善して改革開放に乗り出す。1979年には王稼祥の名誉が回復された。

中国は大国政治を重視し過ぎるあまり、対外的な選択を誤ることがある。毛沢東時代の轍(てつ)を踏まないよう、習近平にはぜひ、昔の上司の成果を思い起こして欲しい。

(益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授)

実力に沿った対外援助を